

3. 事業者インタビュー

取材レポート その1

一般社団法人日本旅客船協会からご紹介いただき、フェリーを運航（苫小牧～仙台～名古屋）する太平洋フェリー株式会社（名古屋市）を訪ね、安全統括管理者、船長にお話を聞いてきました。

<話し手>

廣津玲治さん：安全統括管理者

山田成宏さん：きそ船長

<写真提供> 太平洋フェリー（株）

――社員数と運航隻数について教えてください。

「海上勤務約 220 人、陸上勤務約 110 人でフェリー3 隻を運航しています。」

――特に安全で力を入れていることは何ですか。

「安全最優先の理念は常に発信しているのですが、それを真に実現するためには、社員の一人一人が何をすべきか、考えて判断する力を養うことが大切であり、そこに主眼をおいて安全講習や訓練を行っているところです。」



きそ

――船長は、風が比較的強い日など、着岸の際に操船で工夫していることはありますか。

「本船は受風面積が片舷で 5,000 m²を超えてきます。真横から風を受けた場合には、8~10m/s の風で操縦性能に影響しますので、風を真横から受けないように入ります。速度は、下げ過ぎれば操縦性能に影響しますし、上げ過ぎれば岸壁と接触するリスクが高まります。慣れた港と経験が少ない港では、感覚が大きく異なりますが、慣れは安全を阻害する要素になりますから、極力、初めて入港するときの感覚で操船することを心がけています。」

――安全教育はどのようなことを行っているのですか。

「若手船員に対しては、航路の端々で撮影した写真を見せ、その状況で何を注意するか問いかける講習会を行います。若手船員は近いところに意識が行き過ぎて遠くを見ない傾向がありますので、もう気にしないでいいポイントや次に気にすべきポイントなどを考えさせるようにしています。」

――受講時の社員の姿勢はいかがですか。

「講習会に他の船社の安全統括管理者などを招いたことがあったのですが、弊社の社員は積極的に参加していると感心していただけました。この積極的な姿勢が弊社の特徴であり、強みではないかと考えています。」

――積極的な姿勢にさせる秘訣はどこにあるのでしょうか。

「社長は、訪船した際の昼食会の場などで、一人一人と仕事のことでプライベートのことでも話します。社長が社員一人一人を気に掛けていることが、社員を積極的な姿勢にすることにつながっているのではないかと思います。」

――訓練で大切にしていることは何ですか。

「いかに実践に近い形でできるかということです。去年は、大学から先生をお呼びして船内で地震・津波に関する講演会を行い、名古屋市民約 120 人を招待したのですが、船内を案内している最中に地震が発生した設定でターミナルビルの屋上まで招待客を案内する訓練を行いました。船のことを知らない一般の人を誘導したら、実際の状況に近くなると考えました。」



――事故が起きていないそうですが、船長はどういったことを大切にしていますか。

「船舶の安全は、過去の事故を教訓として作られたルールや対策の上に成り立っている部分が多く、経験工学的な側面があると思っています。事故の当事者になって題材を供給する立場になってはいけませんが、自分の経験を下の者につないでいくことが大切だと思っています。」

――他社が参考になる安全対策がありましたら、教えてください。

「ハードをいくら充実させても使う人間の質が低くては意味をなさず、使う人間の教育にかかってくるとなっています。弊社では、人材の「材」は、財産の「財」を用いており、人は宝として育ていき、それによって安全を確保するのが企業風土になっています。」

取材レポート その2

一般社団法人日本旅客船協会からご紹介いただき、横浜港で観光船と海上連絡船を運航する株式会社ポートサービスを訪ね、運航管理者、船長、安全管理顧問にお話を聞いてきました。

<話し手>

石田史朗さん：運航管理者

大石 明さん：マリンルージュ（観光船）船長

久保重行さん：安全管理顧問

<写真提供> (株) ポートサービス

――社員数と運航隻数について教えてください。

「海上勤務約 30 人、陸上勤務約 50 人で観光船 2 隻と海上連絡船 4 隻を運航しています。」

――風が比較的強い日など、着棧の際に操船で工夫していることはありますか。

「山下公園の棧橋は氷丸がある関係で風向が急に変わるときがありますので、大きく棧橋から離してスラストで少しずつ寄せていく操船をするようにしています。あらゆるケースを想定しながら、丁寧に焦らず操船することが大切だと思います。」

――安全教育はどのようなことを行っていますか。

「社員全員に対して一度に行うことは難しいので、同一テーマで 3 回に分けて講習会を実施し、全員が受講できるようにしています。安全管理顧問に講師をお願いし、最近起きた事故（船以外にもバス事故など）を盛り込んでいただいています。」

――安全講習で講師をする上で大切にされていることはありますか。

「「そんなこと知っている」と思うようなことでも、それが刺激を与えることにつながりますから、愚直に繰り返し、少しずつでも事故防止につなげることが大切だと思います。」

――体験型の訓練が役立つと思うのですが、何か工夫されていますか。

「サービス担当を毎年採用していますが、消火器を使ったことがない者が多く、客室区画の火災では、運航要員よりもサービス担当が初期消火を行う可能性が高いと思いましたので、水が入っている模擬消火器で訓練を行っております。なるべく実践に近い形になるようにしています。」



――ヒヤリ・ハット情報の入手・展開はどのように行っているのですか。

「各船、各営業所からヒヤリ・ハット情報を上げてもらい、とりまとめて本社に提出します。集まった情報に対応策が付け加えられた資料が職員に展開されます。上がってくる情報に愚痴のようなものもありますが、何でも集めるようにしないとヒヤリ・ハット情報は集まらないと思います。」

――他社が参考になる安全対策がありましたら、教えてください。

「目新しいことは特にないのですが、おかげさまで、弊社では約 60 年の間、事故がありません。先人たちがやってきたことを変わらず続けていくことが大切だと思います。」

「船員は船員、陸上は陸上という関係にならないようお互いに情報共有を図っていくことが大切なのだと思います。」



マリンルージュ

事故防止分析官のひとこと

本誌の作成にあたっては、(一社)日本旅客船協会、太平洋フェリー(株)、(株)ポートサービスから多大なるご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

取材する中で陸海一丸となって安全に取り組み、「事故ゼロ」をつなげている事業者の努力を肌で感じる事ができました。

事故から教訓を学ぶ一方で、事故が起きないのはなぜなのか、成功事例から学び、成功状態を継続していく考え方も取り入れていく必要があると感じました。

「運輸安全委員会ダイジェスト」についてのご意見や、出前講座のご依頼をお待ちしております。

〒100-8918

東京都千代田区霞が関 2-1-2

国土交通省 運輸安全委員会事務局

担当：参事官付 事故防止分析官

TEL 03-5253-8111(内線 54237)

FAX 03-5253-1680

URL <http://www.ml.it.go.jp/jtsb/index.html>

e-mail

hqt-jtsb_analysis@ml.ml.it.go.jp